近江の水をめぐる

石川　亮

近江の水をめぐる

石川　亮

Title :
The Water of Omi

Summary :
I began making artworks using water I collected from springs throughout Shiga Prefecture in 2010. This marked the start of what has become my ongoing investigation of the background and roots of the various springs of Shiga Prefecture, most of which have names that can be traced back to traditional stories, area names, and the like. The focus of my current research is on the life that sprang up around water sources and the cultures to which the water gave rise.

古代より自然環境と対峙し共存してきた日本人は、それらに固有の名を命名し、自分たちの生きる源として敬意を表してきた。例えば圧倒する山々の存在や、原野より湧き出る泉、流れ落ちる滝、その運動により形を変えた岩、石、木などあらゆる自然の有様や現象に神仏の名を冠したのはその現われではなかろうか。

私はそのような固有の名を冠した場が周囲の人々によって現在もなお受け継がれ、生活の源として精神的、物質的に主たる存在であることに興味をもたずにはいられない。なかでも近江の国（滋賀県）は、四方を山に囲まれ、その山々の合間から流れ出た水は真ん中に大きな水溜りをつくっている。言うまでもないが、〝水のある国〟である。

高度経済成長期に育った私は、水道の蛇口をひねれば、いわゆるH_2Oの水が流れでる。これが当たり前の感覚としてこれまで生きてきたのだ。

近代化と共に上水道が整備されるまで、生活を営む人々にとって水は我々の生活と同様、当たり前のものだったのであろうか、上水道の水でしか生活したことがない私には、どうしても水道がない生活に実感が持てないのである。そこで疑問とし

て、上水道のそれとは別の水との生活や関わり、在り方に、迫ってみたいと考えたのである。

先に述べたように滋賀県は水の国であることから、固有の名を冠した水がどれだけあるのか、大湖に流れ着くと考えられる水源は、何カ所あるのかを自分の足で探し出すことにしたのである。

一、全体の水・固有の水

二〇〇七年、美術家である私にスイス、ジュネーブの美術学校の先生の誘いで水をテーマにした展覧会に参加することになった。このときに私が出した作品アイデアは、日本の湖（琵琶湖）の水とジュネーブの湖（レマン湖）の水を混合させ、固有の水でなくなるプロセスをみせる提案をした。よって鑑賞者はその様子を只々見守ることになる。土地の歴史や自然の背景に特徴のある固有の水は、混ざり合うことで固有性は失われ、同時に背景も全て失われる。それは単なる生命として不可欠な水分に成り代わり、名前の無い水、（全体の水）に成り変わるのである。

作品の表現は二つの凹みのある分厚い金属性プレートに、それぞれの水を固体化したもの（氷）を配置する。二つの氷は外気にふれ、時間と共に表面から溶け出し液体となる。やがてその水滴はプレートの表面に綺麗な二つの水溜りをつくり、それらは互いに少しずつ近づき張力が働くことによって一つとなり混ざり合うのである。鑑賞者は改めてそれぞれが別々の水源から取水されたことを知り、目前で一つになった水が名もない水に成り変わることを理解するのである。

次に二〇一〇年と二〇一二年、湖国に住む私は更に水に関しての表現を発表する機会を与えられた。それはスイスでおこなった二国の別々の水を混合させ融合する表現に対して、自国の地元の固有の水をめぐる表現へと展開する。

四方を山々に囲まれ、真ん中に大湖をつくる近江（滋賀）の水源を探り出し、それらを取水し、プレートの上に配置する。球体に凍らしたいくつかの湧水を混合させ、融合した水（全体の水）をつくる作品を計画するに至った。

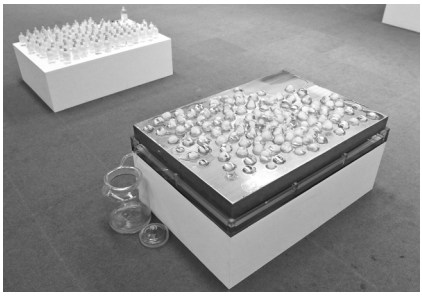
いよいよ近江の水をめぐるフィールドワークから始めることになるが、地図や観光情報などの資料から調査を開始するが、思った以上に情報が集まりやすいことに気付いた。今日では個人のウェブサイトからの情報が頼りになることも多く、それらを辿りながら実際に現地で水を汲んでいると地元の人からの紹介で、現地人のみが知る湧水に巡り会うことにも恵まれた。そこには地域で受け継がれてきた伝承や民俗信仰も一緒に知ることになり、興味深い経験をすることになった。二〇一〇年三月の時点で八〇カ所、二〇一二年十一月時点で一二〇カ所近くの固有の名を冠した水を確認している。

これを融合させるプロセスを「全体―水（近江の水源）」と

題し、先ずは美術作品として発表することに意識化した。近江の国（滋賀）に、たくさんの固有の名を冠した水が存在し、結果として作品の成立と共に湧水を紹介することになったことから、この固有の水より具体的な起源を探り出す意識へと方向付けられた。ここでは水質や成分の探索調査より、どのようにして現在もなお、存在をあらわにし、受け継がれてきたのか、それらがこの湖国にどれだけ現存するのか、生活、民俗、宗教、交通など様々な要素から迫り、背景を探究することを主たる研究として進めることとした。

2007年スイスジュネーブでの展覧会の様子

同展覧会へ出品された作品「全体ー水（レマン湖ー琵琶湖）」（部分）



2012年滋賀県立近代美術館「自然学」にて出品された作品「全体ー水（近江の水源）」

帯刀田の水（たいとうだのみず）

湧水の紹介を始めるに至って、最近縁あってめぐり合えた湧き水を紹介しておきたい。湖北、余呉湖の湖畔に川並という集落がある。その水辺に近いところに湧き出るスポットは存在する。石碑が建っており、そこには「餓鬼に来て仏にかわる清水かな」という句が読み取れる。川並在住の桐畑博夫（きりはたはくお）さんの話によると、別名「末後の水」と呼ばれ、死期が近づくとこの辺りの人はこの水を飲まれるそうだ。この湧き水から西の山側へ視線をあげると大きな楠がたっており、その根っこ辺りにこの集落の先祖が眠る墓地があるそうだ。その辺りから地中に染み込んだ水がこの場所に湧き出ていることから、

この水を飲むと先祖に会いに行けると信じられているそうである。

名前の由来については、戦国時代、賤ヶ岳の戦いに備えた武士が帯刀をこの水で研いでいたとの伝承が今も伝わり、集落内での呼び名になっているそうだ。

現在、鏡湖と呼ばれる美しい余呉湖の水は北から流れる余呉川より余呉導水路が引かれている様であり、帯刀田の水は余呉湖へ湖畔から湧き出る唯一の水となっている。

帯刀田の水を汲む筆者

二、職の水、用の水（しょくのみず、ようのみず）―

近江の水（水源）において、特に名前がついている水や、現在も周囲の人々の手で大事にされている水をこれから紹介して行きたい。中には名前がつくに至っていないが、古くから地域の人々によって大切にされ、今日も使われている水も取上げたい。現在、一二〇カ所近い水を確認しているが、水汲みに出かける度に新たな水にめぐり合うことができる。それらをより適切に分類をするには今後更に多角的な観点から考察する必要があると考えている。

今回は近江の文化を支えてきたものづくりにおいて、水が重要な原料であり、地域産業を発展へともたらし、その豊かさが今日に至るまで持続され活用されている水。

この水を「用いる」ことが職を産み、技をみがき、その豊富さが糧となってきた。このような水を取上げたい。

紺九の川戸（こんくのかわと）

野洲市小篠原の交差点から旧中山道を少し入ったところに近江本藍染「紺九」がある。

創業明治三年から天然の藍染めは、原料確保から染における一つひとつの作業に至まで、今日もその伝統の技を受け継いでいる。国の重要文化財「紺紙泥華厳経」の修復や桂離宮松琴亭（茶室）の襖の壁紙、市松藍染紙を手がけている。

敷地内には、藍甕（あいがめ）で染める紺屋（こうや）と呼ばれる建物や裏庭には藍を筵（むしろ）と重ね合わせじっくり発行させ、「すくも」をつくる先代のつくった室（むろ）がある。その中庭との間に、なにやらぷくぷくと音を立てる水場、川端のような場所がある。

紺九を受け継ぐ森芳範（もりよしのり）さんにお話を聞くと、そこから湧き出ているのは地下水であり妙光寺山と田中山との山間から流れる水系か野洲川の水系であるかわからないが、そ

の水は藍染めの行程で灰汁をつくる時に用いられ、これが染まり具合をみるのに非常に重要であるとの事、一切薬品類を使わない事から水道水では余分な薬品成分が混入してしまい、あざやかな藍色の仕上がりにならないそうだ。またこの地下水は、染める前の絹糸についた脂分を落とすために炊く際にも使われるそうであり、近江本藍染「紺九」にとって命の水と言って良いであろう。

「この一、三年で周囲は田畑から住宅、商店が変わったことや山手の方でちょっと工事があると地下水は数日濁ってしまうなど環境の変化はめまぐるしい。」と芳範さんは話される。

水に限らず天然の原料である藍、筵の調達や木桶や金盥（かなたらい）などの道具の確保も難しくなっているようだ。このことから本藍染めを持続するには相当厳しい環境になってきていると感じた。明治期からの近代化により、大幅に自然環境が変化し、それに伴う人々の生活様式も変容したことをあらためて感じた。

上下水道が整備される以前は、〝紺九さんの「かわと」〟と近所の人々から親しまれ、飲み水として、或は洗い物などしながら身近な情報交換の場となっていたようである。

紺九の川戸

「すくも」をつくる先代のつくった室（むろ）

七本鎗の水（しちほんやりのみず）

北近江北国街道沿い木之本に、創業四六〇余年の地酒、造り酒屋「七本鎗」の銘柄で知られる「冨田酒造」がある。

地酒の「地」にこだわり、日本酒の原料である米は地元の農家でとれる既存の品種を使用し、水は奥伊吹山系の伏流水である蔵内の井戸水を使用している。江戸期から続く酒蔵は決して大きくはないが、その水を中心に酒造りの手順が段取りされているように私の目には映った。

冨田酒造十五代目蔵元の冨田泰伸（とみたやすのぶ）さんにお話を聞くと、その井戸水から豊富な水が湧き上っているからこそ、酒造りができるのだと、またこの水でないと「七本鎗」ができないと断言されている。

泰伸さんが蔵元になり、「地」にこだわることを改めて見いだし、地元の農家とその土地でできる「米」を使う事から更に

広がり、地元の農業高校で学ぶ高校生がつくるお米を使用した「七本鎗 長農高育ち」を店頭で販売することなど、「原料」「つくり手」「次世代育成」と全てを地元の手でつくり上げる姿勢があらわれている。私がこの造り酒屋の水に着目したのは、その気持ちの源が蔵内の井戸水に他ならないと感じたからである。酒は言うまでもなく「ハレ」も「ケガレ」も人々にとってその輪の中に必ず存在し、奉られてきた。即ちこの水は現代でいう「メディア」そのものであると私は考える。結果として木之本、ひいては伊香郡の町づくりを担ってきた水（地酒）ではなかろうか。

泰伸さんはこうも言う。「しかし近年本当に若い人が木之本、湖北から遠ざかっている。次世代のこの町はどうなるのか？」と危惧されている。

酒造りと町づくりは表裏一体と言って過言ではない。

江戸期から続く冨田酒造

蔵内で水を汲む筆者

かなぼう

旧近江町（現米原市）湖岸道路沿いの少し東へ入ったところに世継（よつぎ）という集落がある。周囲は田畑がひらけ、伊吹山が視界に入ってくる。私がはじめてその地を訪れたのは二〇一〇年冬、近江の湧き水を探しはじめた頃である。車一台が走れる道を進むと神社があらわれ、気の向くまま歩いていると「ジャバジャバ」という音が聞こえてきた。家一軒分の開けた所に目的の水を発見した。驚くほどの勢いで湧き出ており、小さなプールが二段になった水場には先客が何やら仕事をしていた。私はそっと顔を覗かすと「人間は仕事せなアカン」といきなりその先客（おばあちゃん）が話しかけてこられた。上の段のプールに沢山のカブをぷかぷかと浮かせ、脇にあるタワシでカブをこすっている。それが終わると改造乳母車にカブを大事に乗せ、「お先」と一言。その間先客と話をしていたのを覚えているが、冬の寒い中、一時も手を休める事なく話されていた。先客の話では金属のパイプが地面に突き刺してあるだけで自噴しているとの事、金気が強くプールの淵には何かが付着しており温泉の匂いがした。少し離れた地面に石のプレートがある。読むと「水の湧き出ている泉及び洗い場を総称した言葉で、

この水源は遠く霊仙山に発すると言われている。深さは地下百米ほどあり、鉄分を含むため茶の湯には適さない…平成八年十月淡海文化」とある。しばらくして先程の女性が忘れ物をしたのか戻って来られた。そして一言「あんたらはこの水飲んだらお腹こわすで！」と。

近江には今日も伝統の職や技、労働と共にこのように水が受け継がれている。この水が職を産み文化を受け継いできたのであろう。先述したように昨今これらを持続するには難しい状況になってきているようだ。

目前の利便性を追求する豊かさの時代から、職と技と水が無理なく持続できる環境が我々の求める豊かさではなかろうか。

沢山のカブが浮かぶ

地面に石のプレートがある

三、暮しの水、近い水（くらしのみず、ちかいみず）―

私が水を探し出す切掛けとなり、最も感覚を研ぎすます要因の一つである水にせまりたいと思います。

今日の生活において「水道の水」は蛇口をひねると流れ出し、しめると止まる。この当たり前と思っている水は一体何処から来たのだろうか、私はこの問いに直ぐに答える事は出来ない。どこか「遠く」で浄水され、地中の管を通って来ているのであろう。

この問いに対する答えが直ぐにでる水、自分の居場所から「近い」場所に水源があり、今日においても昔と何ら変わらない「暮し」の水を見て行きたい。

針江の生水（はりえのしょうず）

高島市新旭の針江（はりえ）地区は集落一体が湧水群となっている。そこは北西に比良山系を望み、その北側を尾根伝いに大きく弧を描きびわ湖へと注がれる安曇川の最下流域に位置している。この周辺は名も無い自噴水がいたるところで湧き出し、びわ湖の周囲において最も多く水が湧き出ている地域である。

中でも針江に湧き出る水は透き通っており、とても美しい。私が言うまでもないが、地域の方に手渡された竹筒の器に水を汲み、一口飲むとあらためてそのおいしさ、まろやかさを実感する。不思議な事に、ここから一集落湖岸へあるいは山側へ行

くとこのような水は湧き出ていないようであり、何かこの場所が神域めいたものを感じざるを得ない。針江ではこの水を生水（しょうず）と呼んでおりまさに「生きる水」なのである。

この地域の元漁師、田中三五郎（たなかさんごろう）さんのお家に伺い、お話を聞く事ができた。玄関を入ると土間になっており旧家の佇まいが今に残っている。あたりは薄暗く、前に進むと右側へ一段下がるつくりになっている。辿り着くとそこは眩しく、キラキラと揺らめく光に満ちている。直径一メートルほどの壷池に水が注がれその下方へもう一段下がったところに三メートル四方の囲いがある。そこには口をぱくぱくした鯉が数匹おり、どうやらこの空間は外と一体となっている事に気付く。これが内川端（うちかばた）である。

三五郎さんが「ある日この鯉、何故か元気が無いんや。なんか〝いつもと違うもん〟がながれてきたんやろなあ！」と話された。同行した学生はその言葉にドキッとしたようである。〝いつもと違うもん〟を意味する物が環境に不適合なものであることはすぐに想像はついたが、三五郎さんが日々の自然環境の変化に敏感である事がじわじわ伝わって来た。鯉と共存する事により周囲（近く）で何が起きているかを未然に感じ取っていたのである。そのことは私たちの生活の水があまりにも遠いところから来ていることに気付かされることとなった。

我々の自然に対する危機感はいつも情報の中にある。「○○の数値が空気中に××あり、身体に直ちに影響を及ぼさない。」などと言った言葉にリアリティーを感じている。我々は数値や理論上で表される文明の力が、自然の脅威と対峙できるのであろうか。

ここには自然から贈与される恵みと自然の変化を感じ取る力が暮しの中に息づいていると感じた。

針江の生水　内川端の鯉とたわむれる学生をそっと見守る三五郎さん

針江の生水　内川端の外側は水路とつながっている。

蛭谷の湧水（ひるだにのゆうすい）

八日市（東近江市）から伊勢の国（三重県）へと抜ける八風街道を走り、永源寺ダムをこえ更に進むと小椋谷六ヶ畑と呼ばれる地域がある。その一つ黄和田あたりから北側へ入ったところに古くは茶所として知られる政所（まんどころ）がある。まだ山奥へ進むと蛭谷（ひるだに）と呼ばれる集落にでる。現在

では七戸くらいの小さな集落であるが隣の集落、君ヶ畑（きみがはた）と並んで生業を「木地師」とする歴史と伝承が色濃く残っている。

この地にはじめて訪れたのは二〇〇九年の夏である。暑い盛りに木地師の里をうろうろしていると「チョロチョロ」という音が聞こえ、その音源に誘われるように近寄って行くと音源ならぬ水源を発見した。山の斜面に重なるように集落が立ち並んでおり、自然石を積んだ石垣はこの集落をしっかりと支えていた。水源は崖から連なるその石垣の間から溢れ出ており、その水をうまくパイプにつなげ一旦貯水槽に貯めている。それを日差しの良い場所まで引き、皆が集まる水場が設けられていた。

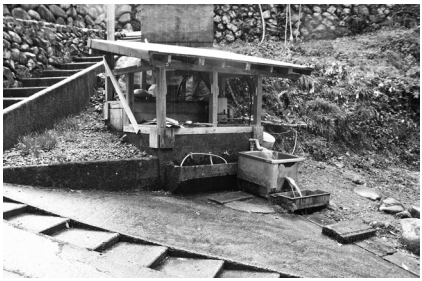
二〇一二年初夏に、木地師の伝承を取材する機会が訪れ、蛭谷在住の小椋正美（おぐらまさみ）さんにお話を伺った。その時に水についてもお話を聞く事ができた。「私が小さい頃から絶えることなく水が出ており、この地域の生活の水である事は言うまでもなく、生まれる前からずっと湧き出ている水である。」と話された。

更に私はお話の最中、気になったことがある。それは丁寧にお茶の用意をされていたことだ。お茶の葉を急須にいれ、湯を湯のみにいれてから随分と時間をかけ、またそれを湯のみから急須に移し、ゆっくりとお茶を出していただいたことである。お茶の香と味は非常に印象深いものであり、文章では到底伝える事が出来ない。その手順も形式張ったものではなく、自然にお話しされながら入れていただいた事を記憶している。後からお茶の話も聞くと、「この辺りでは皆、自分の家に茶畑があり、そこでとれるお茶を飲むのが習わしだ。」と話された。この小椋谷では生業を支えた木（木地）とお茶は自然の恵みであり、神であり、生活と一体化していることの現れである事を感じた次第である。

我々はイギリスやインドの輸入紅茶、或いは宇治や静岡の玉露などを専門店で購入し、お茶を楽しんでいるが、ここにも「近い水、茶」の差を感じずにはいられなかった。

最後に蛇足であるが蛭谷の一つ下流の集落、政所が「宇治は茶所、茶は政所」とうたわれたのは茶が生活の一部であった事は

蛭谷の湧水　石垣の連なる集落にある水場



蛭谷の湧水　斜面にある水場

当然の事、途切れる事の無いこの湧き水とのマッチングが持続されていたからではなかろうか。

エンコ（えんこ）

瀬田の唐橋東詰から北へ少し歩くと平屋の一軒家が軒を連ねる懐かしい昭和の空気が漂う地区がある。大津市瀬田一丁目は近頃そこの枯渇していた湧き水が復活し不思議な程に溢れ出ているという知らせを聞いた。早速、まちづくり住民グループの村田譲（むらたゆたか）さんと連絡をとり、お話を聞かせていただいた。

前回紹介した米原市世継地区の「かなぼう」と姿形がよく似ている。湧き水は上下二つの水槽にためられ上の水槽は飲用、下の水槽は瀬田川で捕った魚を生け簀（す）代わりに入れたり、洗濯をしたり、昭和三〇年代頃までは近所の住人と共同で使っていたと聞く。なぜその湧き水が再び湧き上ったかであるが、最近、隣接する大手家電メーカーの工場が撤退したことで地下水を使わなくなったことが大きな原因ではなかろうかと話される。

工場は発展と共に地下水をたくさん汲み上げ、その使用量が増えるのと、同時に上水道が整備された事で周辺住民は「エンコ」を次第に使用しなくなったのであろう。

近年我々の生活を豊かにし、日本の近代化を担って来た大手家電メーカーの撤退や規模縮小、吸収合併の話を耳にする。それは高度情報化社会の隆盛が一段落し、コミュニケーションツールなど多くの製品を世に送り出す利便性を追求して来た時代から、人間同士が向き合って対話する時代に変化して来たのではないだろうか。ここ瀬田一丁目では「瀬田唐橋まちづくりの会」が発足し、八カ所あった「エンコ」を復元する計画があるようだ。「まちの宝として郷土史の伝承や防災面でも活用していきたい。」という思いを村田さんは話されていた。

これから我々が目指す本当の豊かさとは、となり近所の方々と水場を囲んで対話をする。そして、いざという非常時に助け合える関係でいられることではなかろうか。

エンコ　現存する上下二層式の遺構

エンコ　最近復活した湧水を汲む筆者

四、道端の水、巡りあう水
（みちばたのみず、めぐりあうみず）

地図を片手に目的地に向かって水を探し出す途中、ふとした切掛けで巡り会うことになった水、あるいは探しながらも水場が発見できず通り過ぎてしまうような存在の水を取上げます。湧き水を探すには事前の準備が重要である。予め地図と睨み合い、「だいたいこの辺やろう！」とつぶやき、その場所を想像しながら地図に印を入れて行くのであるが、何回かめぐっているうちに、概ね水場の条件が見えてくるものである。

社寺や史跡の中にある場合は案内がきちんとされている。主要な街道沿いにある場合は東屋が設置されるなど、立派な表札が建っている。県内のエリアだと一日八カ所くらい回る事が出来れば、上出来である。

しかし、そう簡単に行かないのが、湧き水めぐりの面白いところであり、そもそも地元の人々だけが知っている水場を訪ねるのだから当然のことである。私のようなよそ者がその生活圏に入り込み、湧き水が見つからないとなると、周辺をウロウロする事になるので段々気が引けてきて、悪い気がしてくるのは当然のことだ。

このような状況に陥った時に毎回「水」をいただくことの意味を考えるのである。水は生命体にとって不可欠であることは当然の事、その背景にある地域の「結」の水であるということだ。そんなことを思いながら柄杓とボトルを持って歩いていると「こっちやで！」と近所の方の声がして、とっくに通り過ぎて見落とした「水」にめぐり会えるのである。

今回はそのような、派手な存在観はないが、その周囲の地元に息づく水に迫りたい。

胡桃谷の名水（くるみだにのめいすい）

長浜市余呉町、上丹生（かみにう）から菅並（すがなみ）を走る県道２８５号の脇からその水は突如湧き出ている。県道沿いには蛇行する高時川、東の峰には横山岳、迎いには七七頭ヶ岳（ななづがたけ）を仰ぎ見ることが出来。何の変哲もない道路脇のコンクリートの土手のパイプに導水してある。そこにペットボトルの先を差込み、絶えず水が出ているのである。道路脇の側溝にはステップも設置してあり、取水口の上に誰かの手書きであろうか、木製の立派な表札が掲げてあるのだ。「この名水は古来より湧水し、生命の源となる名水です。付近を清浄に!! 胡桃谷の名水」と記されていた。

私は二〇一〇年の冬と二〇一二年の初夏に二度訪れ汲水したが二度とも通り過ごしている。車で二回三回と前を走ってようやく辿り着くのである。更にこの県道２８５号の先、菅並方面には古刹、塩谷山・洞寿院（えんこくざん・とうじゅいん）という曹洞宗のお寺がある。その山門の脇に山側から水が出ており「みんなの塩谷の水」も同時に立ち寄ることにしている。こ

ちらも同様手書きの木製の表札が立っているが、詳しくは後述したい。

胡桃谷の名水　路側帯ぎりぎりで水を汲む筆者

胡桃谷の名水

栃生の水（とちうのみず）

大津と京都の県境、途中から国道３６７号を福井方面へ走り、高島市に入って直ぐのところに朽木栃生という地がある。ここも道路脇の斜面側に水飲み場が設けられており、取水口の横にはお地蔵様が祭られている。比良山系の最高峰、武奈ヶ岳を南東方向に仰ぎ、国道と並走するように安曇川が流れていることから、比良山系に染み込んだ水が安曇川へと流れ込んでいるのであろうと想像がつく。おそらくこの辺はたくさんのこのような水が出ているのであろう。

以前ここを通り、気になって車を止め、水を汲んでみた。偶然地元の農家の方があらわれ、「わしらがここの水を汲めるようにしたんや！」と話しかけられた。ここは側道が少し広めにとられてあり、気をつけて見ていると比較的気付きやすい水場になっている。私が訪れた時は表札などで名前を示すものはなかったが、ここも地元の方が掃除をされているようで、通る度に水汲みに来る人が増えているように思われる。

偶然みつけた水場であるが、自然の恵みに対する人間の思いは高まって来ているのだろうか、もしかしたら名前がつけられ表札が立てられているかもしれないと、ふと考えた。

栃生の水　山側から湧き出る水を汲む筆者

栃生の水　道路脇の地蔵の横に水場がある

白清水（しらしょうず）

米原市（旧山東町）のＪＲ柏原駅近く、国道21号柏原東交差点から北に入り踏切をこえた小道の脇の山裾にその水場はひっそりと佇んでいる。何回か私も訪れたが水を汲んでいる人と出くわしたことは一度もない。その理由は湧き水の水源をみれば一目瞭然、水は枯れてはいないが非常に少なく、手を洗ったりするほど勢い良く湧き出ているとは言えない。

しかし、ここは周囲の整備がなされた上、表札がしっかりと立てられ、伝説を受け継ぐ名前がつけられている。表札には「白清水（しらしょうず）　小さな泉で、古くより白清水または玉の井と呼ばれています。『古事記』に、倭建命（やまとたける）のみこと）が伊吹山の神に悩まされ、この泉で正気づいたとあり、また、中世仏教説話『小栗判官照手姫（おぐりはんがんてるてひめ）』に、姫の白粉（おしろい）で清水（しみず）が白く濁ったことから白清水というようになったとあります。平成八年三月　山東町教育委員会」と記されている。

もう少し調べてみると国道21号は旧中山道であり、南西方向に柏原宿があります。東西約一・五キロにおよぶ宿場は中山道の中でも大規模な宿場町であり三四四を数える軒が並んでいたと伝わっている。また伊吹もぐさの産地でもあり、旅人で繁盛したことがうかがえる。

二〇〇二年に制定されたまちづくり条例「歴史的・文化的景観または、自然景観の形成のための整備等が必要な地区」として指定を受け、二〇〇六年には米原市の柏原地区環境整備事業において白清水の周辺も整備されているようだ。

一見、道端のなんの変哲も無い湧水と思いがちだが、思わぬ大物との巡り合せであった。

白清水　少ない湧出量の水を丁寧に汲む

白清水　立派な表札が立つ

岩間の水（いわまのみず）

西国巡礼三十三所観音霊場第十二番札所、岩間寺から蛇行する参道を少し下山したところに、祠が二つ並んで建っておりその脇から勢いよく湧き出る水がある。急な坂道だが、曲がり道の少し奥まった場所に取水口があるため、比較的足を止め易く、いつも誰かが水を汲んでいるのを目にする。

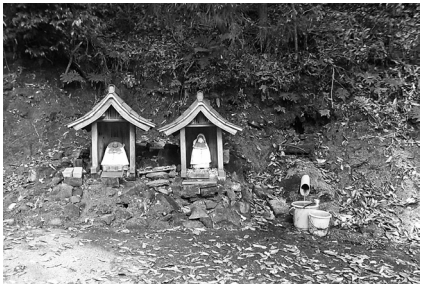
本当のお目当ては岩間寺（岩間山正法寺）にある「雷神爪堀

の湧水」であり、この湧水も伝説を持つ水であるが詳しくは後述することにする。巡礼の道を車で逆走することになるが岩間寺へと登る途中、突然目に飛び込んで来た水場である。音羽山系岩間山は日本海側から複数の断層が比叡山を経て複雑に交差しているとのことだ。永い年月を経て沢山の層を通過して溜まった伏流水が地中に溜まっているようである。

岩間山は京都と近江をまたぎ、このように永い年月をかけ豊富な水を潤して来たことを思うと日本の文化の源流がここにあるのではないかと考えずにはいられない。小学生の頃、京都伏見で育った私は父親に連れられ、伏見醍醐の上醍醐寺（第十一番札所）から岩間寺まで歩いたことを思い出した。巡礼者の多くもおそらくこの水で喉の乾きを潤したにちがいないであろう。また伏見はその名のとおり伏水が語源であり、伏見桃山の御香宮（ごこうぐう）にある御香水（ごこうすい）が有名である。今となっては伏見も多くの湧水（伏流水）に名称がつけられ観光用湧水マップがつくられる程、町のアピールになっているようだ。

偶然出会った水であるが、今日「近江の水をめぐり」ながら、私の育った町と偶然繋がった「岩間の水」を紹介することになった。

今回紹介した「栃生の水」と「岩間の水」は正しい名称を知ることが出来なかったため仮につけている。本当の名称をご存知の方、或いは地域での呼び名をご存知の方はご教示いただければ幸いだ。



岩間の水　祠のとなりから湧き出る

岩間の水　突き刺してあるパイプの奥からも湧き出ている

五、人物の水、伝説の水（じんぶつのみず、でんせつのみず）

歴史に名を刻んだ人物ゆかりの水、あるいはその水場が今日に至まで耐えることなく湧き出流ことにより伝説が場をつくった。そんな湧き水に迫ってみる。

湧き水を探すにあたって、比較的簡単に情報が見つかり且つ、現場でも周辺をウロウロと探しまわることはそれほどなく、あっさり見つけることの出来る水が今回迫る水だ。そもそも有名人に所以のある水は、その名前が大きい事から庶民に取っては覚えやすく、伝説も時代時代の様々脚色がつき、伝説が伝説

を呼ぶことにより一層その場が名所となったことは容易に想像がつく。

周辺環境も整備が行き届き、必ず案内の表札が設置され、そこには湧き水の由緒がしっかりと記載されている。ここまでくると観光名所のひとつになり、語り部と呼ばれる人々が積極的に紹介されるようになってくるのである。最近のスピリチュアルスポットブームもあいまって、街の案内絵地図にイラスト入りで載るほどであり、湧き水の名称そのものが名所になりつつある。

話は少し変わるが、私は湧き水を汲む時に、必ず写真撮影を行う。その決まり事は次の三点だ。先ずはその湧き出る様子を借景となる景色を入れ、どのような環境で湧き出ているかを撮影する。これはこの環境が今日現在は保たれているが、近い将来その状態が維持されているかわからないからだ。次に私自身が湧き水を汲む様子を同行する助手（その多くは妻、次に少し関心のある学生）に撮影をお願いする。これは当然のことながら確実に自分自身がその湧き水を汲水（きっすい）していることの証明として。最後に取水口のアップ、或は湧き出る水面の様子を撮影する。これも一番目と同じく、湧水量や透明度、その豊かさを記録しておく必要があると考えるからである。

また昨今の環境の異変による予期せぬ災害で、いつまでもこの状態が持続するとは限らないことが写真撮影を必ず行うことにつながっている。

話は戻して今回迫る湧き水は前述したように、歴史に名を刻んだ人物ゆかりの水であることから、周辺整備が行き届いており、写真撮影が比較的容易、足場がしっかり確保でき、こだわった被写体のイメージをつくることが可能な比較的優等生のような水に迫ってみたい。

梅の川（うめのかわ）　織田信長

近江八幡市安土町、ＪＲ安土駅をびわ湖側へ下車してすぐに西側へ歩くと常楽寺大堂（じょうらくじだいどう）と呼ばれる地区に出る。道幅は狭く碁盤の目状に路が延びている事から城下町や寺内町として古くから、この町が栄えたことが想像つく。所々曲がり角に木製で渋い感じの小さい案内板が立っている。よく見ると「梅の川→この先」と書かれている。その路地を曲がりしばらく歩くと「コボッコボッ」と小さい音がした。住宅地の一角にその水場は設けられており、道路から一段下がったところから湧き出ていた。湧水量は少ないようである。石段で囲われ、その上は竹垣が設けられており、きちんとした水場としての存在を放っている。脇には表札が設置され、「梅の川この由来は、織田信長の家臣武井夕庵が難波より珍茶を求めて来、此処の水にてお茶を入れ信長に献じたところ信長非常に喜び、其の後お茶の湯には常にこの湧水を使用されたと言われている。」と記されていた。

他にもこの西側、直ぐ裏手に当たるところに音堂川（おとん

どがわ）湧水と呼ばれる湧水と、びわ湖側へ少し歩いたところに北川湧水（喜多川とも）がある。これらは梅の川と対象的に湧水量が非常に多く豊かである。たくさんの鯉が泳いでおり、新旭の針江の生水と同様、浄化作用に一役かっているようだ。二〇一〇年の冬に北川湧水を訪れた時には近所の農家の方であろうか、太く育ったネギをゴシゴシ洗っておられたのが印象的だった。

ここからもう少し北上すると常浜という港公園に出る。ここは室町時代、観音寺城の外港として栄え、明治初期まで蒸気船の寄港地として活気にあふれていたようだ。更に北上すると西の湖が広がり、この湧水郡の水が注がれ太湖へとつながっているのだ。

梅の川　音の出る方へ柄杓を入れ汲水する筆者

梅の川　立派な由緒書きが脇に立つ

戦国の世に、天下を目前にした信長が拠点を安土においたのは、交通の要衝であったことは言うまでもないが、豊かな水に恵まれていたこも重要な要因であったのではなかろうか。

三尺の泉（さんじゃくのいずみ）中江藤樹

高島市安曇川町、国道１６１号線を大津より北上し、白鬚神社、大溝城跡をこえ、しばらくすると、右手に藤樹の里文化芸術会館が見えてくる。その交差点を右折したところに上小川と呼ばれる集落にあたる。そこから少し南下したところに良知館、その隣に藤樹書院跡が見えてくる。ここの門を入ったところに「チョロチョロ」と清らかな音を立て湧き出ているのがわかる。これが三尺の泉。掘り抜き井戸が回収され以前のように地下水の湧出が復活したそうだ。取水口は綺麗に整理され、庭や植栽の手入れが丁寧にいきとどいており、清々しい気持ちになる。横には飲料用のコップが備え付けてある。当然ここにもしっかり案内板が設けられており、「三尺の泉　この書院の掘抜井戸が改修され、その時以来、こんこんと清水が湧き出すようになりました。美しい湧水が見事であったため、蕃山の「万里の海は一夫に飲ましむる事あたわず、三尺の泉は三軍の渇これは、大海の渇きをいやすことは出来ないが、三尺そこそこの井戸でも万人をいやすことができる、という意味です。」と記載されていた。

中江藤樹は、江戸初期における近江の国小川村出身の陽明学者。二七歳で母への孝行と健康上の理由により近江に戻り私塾を開く。屋敷に藤があったことから、門下生から藤樹と呼ばれるようになる。藤樹が四一歳で亡くなる半年前に「藤樹書院」を開き、門人の教育拠点とした。その説く所は身分の上下をこえた平等思想に特徴があり、武士だけでなく商工人まで広く浸透し「近江聖人」と呼ばれた。代表的な門人として熊沢蕃山、淵岡山、中川謙叔などがいる。

この周辺は道沿いに水路が多くみられ、無名の湧き水が所々から湧いているようである。比良比叡の山々からしみこんだ水が伏流水となり、安曇川水系となっているのであろう。水の豊かな場所には豊かな人材が育ち、後世に受け継がれるのだと感じつつ、水を汲んだ。

三尺の泉　整備の行き届いた庭で水を汲む筆者

三尺の泉　藤樹書院跡

若草清水（わかくさしみず）蒲生氏郷

近江商人の町、蒲生郡日野町、ここは綿向山を眺め、その里宮として馬見岡綿向神社を中心とする集落がある。伊勢、京の中継点でもあり、全国から参詣する人々の行き交う場所であったことは言うまでもない。町の中心部、村井の町並みをすぎたところに、河川の堤防沿いを予感するような開けた場所があらわれた。その目前に地蔵堂が建っており、すぐ下には整備の行き届いた美しい水場がある。私が訪れたときは何か箱の形をした籠が取水口近くにおいてあり、その中をそっと覗くと小さな魚が泳いでいた。水面から水底がくっきりと見え、非常に綺麗である。これが「若草清水」と呼ばれる湧き水だ。

千利休の七哲の一人だった日野城主蒲生氏郷は茶の湯にこの水を使ったという由緒ある清水だそうだ。この泉のそばには趣のある石の句碑がある。ひとつは天明年間に画家の島崎雲圃が清水のいわれを書いた碑を建てたそうだ。もうひとつの石には歌が刻まれていた。詠むと「たちよれば　やがて心の底すみてむすぶにあかね　若草の水」とある。これは慶応二年（一八六六）に河原田町の谷孝道が若草清水をよんだ歌碑を建てたということだ。この他、日野の三名水と呼ばれる湧き水がここにはあるようだ。ひとつは東へ五分程歩いたところに興敬寺がある。そ

の南側の脇を入ると土手になっており、落葉に埋もれるかのごとくそこから水が湧いている「落葉の清水」。もう一つは「清水脇の清水」という水が湧いているそうだが今は埋没してしまい涸れてしまったようだ。

蒲生氏郷が茶の湯を楽しみ、近江商人が栄えた。そして綿向山を仰ぐこの地に人々の繁栄が無いはずがないのだ。そこに湧き水があるのは当然のことだ。と、あらためて感じながら柄杓で水を汲んだのである。

若草清水　趣のある石碑の前で水を汲む筆者

若草清水　地蔵堂横の石段を下りたところに水場がある

弘法の水（こうぼうのみず）弘法大師

弘法大師の名を借りた水は全国にたくさんある。代表的なものに広島県福山市赤坂、神奈川県秦野市、愛媛県西条市、石川県七尾市、福井県越前町、京都市伏見区小栗栖など数多く確認されている。また関係の深い水場は四国や和歌山、大阪、伊勢など数えだすと切りがない程である。

我が国、「近江」にもそれは存在した。湖北木ノ本から北国脇往還を北へ、余呉の集落に差し掛かった坂口というところに、日の登る方向に朱塗りの鳥居が見える。扁額には「大箕山」と書かれている。そこは呉枯ノ峰への登山道であり、菅山寺の参道に当たる。登り始めてしばらくすると、道脇に石仏がたっている。そこで手を合わせ、先を急ぐとまた石仏が現れる。次々と現れ、何かに導かれているようである。峠まで登ると菅山寺へは少し下ることになる。しばらく歩くと大きな二本の欅の古木が迎えてくれた。あたりは鬱蒼と茂る樹林の間に本堂、護摩堂、経堂、鐘楼などが建ち並びかつての繁栄の時代を忍ばせる。「菅山寺」その名の通り、菅原道真が中興したと伝わる古寺である。朱雀池を挟んで向いに建つ近江天満宮とは神仏習合の形態をとっていることがわかる。

さて、話は湧水に戻るが、実はここに訪れること三回目にして始めて取水口を発見することができた。二本の欅の向こう側に庫裏があり、その脇の石段を少し下りたところに石仏座像を発見した。なんとその足元から大量の水が湧き出ていたのである。私はそこでようやく気付いた。坂口集落からここまで導いて来た石像こそ「弘法大師」その人であり、ここに四国八十八箇所霊場の圧縮された姿が展開されていることを。

数えはしなかったがその最終地点が、探し求めていた「弘法の水」であったのである。おそらく明治以前の隆盛を図った時代の遺跡なのであろう。

現在は、坂口の人たちを中心とした信仰の厚い人々の手で守られているそうだ。

先述したように四国、近畿、北陸などの地に、この名を冠した水が多いのは弘法大師の残した足跡と地域の人々の厚い信仰が今日にも受け継がれているのである。水は途切れることのない証明そのものなのであろう。

弘法の水　石像の足下から湧き出る水を汲む筆者

弘法の水　菅山寺の欅の古木

追記

滋賀県文化振興事業団が発行する「湖国と文化」に二〇一二年十二月より〝近江の水をめぐる〟と題して近江の湧水を写真と文で紹介する機会をあたえられた。現在まで五回の連載が継続されており、オリジナル文を可能な限り残し、近江学研究所紀要として再編集した。研究の動機として美術作品制作からはじまる「全体の水、固有の水」、次に近江の手仕事を今に伝える水として、「職の水、用の水」、上水道が整備される以前から現在も主たる生活の水として持続する「暮しの水、近い水」、目立たぬ存在ではあるが行き交う人々の潤いとなっている「道端の水、巡りあう水」、歴史に名を残す著名人と所以を残す「人物の水、伝説の水」に焦点をあて、その水の背景に迫ってみた。

先述したが湧水の出自に対し、適切に分類をするには今後更に多角的な観点から考察する必要があるであろう。しかし、美術家である私が今日の生活や現実性の面から迫り、体感し表現することから探究することが重要だと考える。今後も新たな切り口を探しつつ水の出自について迫って行きたい。

成安造形大学附属近江学研究所紀要　第３号

発行日　平成26年３月24日

発　行　学校法人京都成安学園　成安造形大学　附属近江学研究所
〒520-0248　滋賀県大津市仰木の里東４-３-１
電話　077-574-2118

発行者　木村 至宏

編　集　成安造形大学附属近江学研究所

印刷所　宮川印刷株式会社

©Seian University of Art and Design 2014

ISSN 2186-6937